

# 俳諧における「：しかける」の用法

高 羽 四 郎

「国文学研究」第四号に「：しかかるの用法」というのが載せられた。こんど「しかける」を取り出そうとするのも主意は前回と同じである。そのうえ観察の方向にも代わるべき適当なものが得られず、似たような行き方を取る他なかった。結果は「かかる」の時間も増して不十分、そして不安定である。用法は「かける」の方が少しく多岐、例題も煩雑になっているが、逐一の言及は不要のこととて、随意にこれを省略した。例文へ直接加えた「読み」の多いのはその用意であるが、これにはかえって迷わせるような誤謬がありうる。厳正な批判にお委せする。

## 例題 A 人称主語

### I 実義の用法

#### 1 接触

##### a 「おおいかける」

雙へたる木具に羅〔うすもの〕打かけて〔付句〕——助叟（陸奥千鳥二・Ⅱ）

清水三）

参 結構な五器に革をかけて葦〔付句〕——紫華（旬兄弟中・一四八）

俳諧における「：しかける」の用法

引かけた夜着の馴染〔なじま〕ぬ夜寒かな——六風（種麩・Ⅴ名録三）

参 しのかね夜着をかけたる火鍵哉——桃先（笈日記下・Ⅰ雲水五一／

花しさは夜着を懸たる 統猿養下・Ⅳ冬句六三）

錦を八野に織かけて嫁入星〔よめりぼし〕——汝川（桜首途中・一二三）

参 かけてはずや霞の衣さほの山——加新（新霜轍上・Ⅰ春句九一）

##### b 「寄せかける」

枝作る松に階子〔はしご〕をさしかけて〔付句〕——車庸（深川Ⅴ刈株二九）

参 明家に階子かけたる寒き哉——桂之（笈日記中・Ⅵ伊勢七七）

ゆふかはや持せかけたる老の杖——士朗（信濃札下・Ⅱ夏句三五）

参 杖かけて柳の陰の手水哉——常之（孤松・Ⅰ春句一六二）

参 まき藁にへなつく弓をよせかけて〔付句〕——春湖（初時雨下・Ⅴ柿葉三）

##### c 「釣りかける」

洗ひあげた網打懸る柳かな——里芳（世の華二・四八四）

参 染物をならへて掛る柳哉——路健（草庵集詩・Ⅰ春部一〇八）

参 菜の花や脱かけて行梵論〔ぼろ〕の笠——松雨（桜首途中・九九）

参 凧や襟にかけたる珠数の音——牝玄（雑談集首・Ⅲ文通一〇四）

参 五反田の麦もはらりと茹かけて〔付句〕——支考（白陀羅尼・Ⅲ淡雪三二）

参 稻刈て初尾にかくる岡の松〔付句〕——普船（雑談集尾・四三二）

2 方向

a 「散らしかける」

一約瓶水うちかけよ杜若——露白(刷毛序上・Ⅳ孟夏二四)  
参 水乞ふてかけく行やしのふ賣——非石(後拾遺中・四一)  
ふりかける簾の雫や青山椒——晋阿(梅鏡上・一〇五四)

参 簾の露袴にかけし茂りかな——芭蕉(泊船集三・夏句二八)  
屋かほに泥はねかくる田うへ哉——桃妖(童庵集詩・Ⅱ夏部五九)

参 打櫛(うちがひ)に泥をかけけり声の花——浪化(浪化日記・Ⅳ己卯七〇二)

b 「送りかける」

廊から矢文射かける華軍(はないくさ)——播東(菊十歌仙・X十日一五)  
参 一度ハ熊野をかけて和哥の浦(付句)——涼菟(三日歌仙・Ⅴ扇子二七)

大津まで荷はやりかけて涼み哉——北枝(喪の名残下・Ⅰ夏句一七)  
参 西近江かけて祭の相撲ふれ(付句)——梨月(桃實塗上・九七)

乗かけて馬の氣を見る柳哉——柳泉(金冠小田・Ⅲ春句一〇七)  
御通の掃除に砂を荷(にな)ひかけ(付句)——正勝(雪月花上・Ⅳ恋連三七)

3 対向

a 与格十対格

虚無僧の物いゝかける枯野哉——瓜流(其雪影下・Ⅱ秋冬七三)  
類 おもしろい無理いひかける花の関(付句)——三惟(養笠上・Ⅰ鶉使三五)

声高う宿になにやら呼かけて(付句)——稻負(旁門句膝・Ⅳ杜若二二)  
わせたかと諸事の相場を問かけて(付句)——之道(住吉物語下・Ⅱ夏部一三三)

湯揚りの背中の蓋(やいともの)を頼みかけ(付句)——杜谷(東海道上・Ⅷ初桜五)

親共に直に娘をもらいかけ(付句)——嵐青(浪化日記・Ⅱ戊寅七八六)

借りかけし庵の噂やけふの菊——丈草(小文庫下・Ⅱ秋句六三)／統猿蓑下・Ⅱ秋句二二)

花衣背中はかりを見せかけて(付句)——除風(青蓮下・Ⅰ秋部一七)

類 藪入とみせかけて来る堤かな——五波(初時雨上・Ⅱ二月二九)／新雨夜初篇

b 対格

請られて余所へ行かとうらまかけ(付句)——寿峯(其誘集三・二二五)

弁舌に藪入達をのせかけて(付句)——千甫(風中の晴・一九三)

白粉に出女ともか化しかけ(付句)——柳糸(夜の許し二二四六)

普請場に月待かけ九稽古舞(付句)——周我(梅鏡上・八七二)

類 掃除して朝まぢかくる花の庭(付句)——北枝(喪の名残上・Ⅱ櫛一七)

4 志向

とれくと月に應丁鳴らしかけ(付句)——浩々(老旅九・四三三)

こつそりと中稲て酒を造りかけ(付句)——旦齋(次根集・Ⅱ滝川七)

つかくと渡りかけたり春の水——物裁(水月一雙・Ⅱ諸句六七)

比 渡り懸て蕩の花のそく流哉——凡兆(猿蓑二・夏句七五)／渡りかけて 卯辰集上・Ⅱ夏句五〇

鍋のすみ洗ひかけたり村時雨——嵐風(雜談集旨・Ⅱ文通一〇三)

夕月の臙に琵琶を弾かけて(付句)——山風(金櫻集・Ⅱ垣梅三)

比 さそはれて葎打かけたる花見哉——安重(統猿蓑上・Ⅰ春部七〇)

Ⅱ 補助の用法  
1 折りかける  
折かけて又枝かえる椿かな——面超(老旅三・八七)

類 折かけて手をふるひけり夜(付句)の花——紅糸(己巳東武墨直・二三)

折かけてをらすに行し木樨哉——左笠(天保13 年毎集・一七)

類 折懸て捨る枝あり藤の華——桃祖(鏡華下・Ⅱ諸句八三)

折かけた枝のも開く木樞かな——開保(千町田四・I初秋三八)

類 折かけしまゝに咲たる野梅哉——風笛(残花集十・一一三)

うつつ山折かけてある桜哉——声夕(いつを昔・四三)

しかられて折かけて置さくら哉——小半(喪の名残上・V春句一五一)

参 書かけた絵筆を置いて二工夫(付句)——東紅(残花集五・四三六)

## 2 一般動詞

### a 連用形

持掛けて膳ひかえけり蜀魄(ほととぎす)——朱拙(初蟬上・I夏句八)

参 鶯やすりかけた餌を止めて聞く——山旭(己巳東武墨直・四一一)

賤のこやいね摺かけて月をみる——芭蕉(鹿島紀行・I紀行一四)

七草や粧ひしかけて切刻ミ——野坡(炭俵上・V春句二)

葺かけて月見の磯屋荒にけり(付句)——沾徳(続虚栗上・I春部一一〇)

結(ゆい)かけて細繩たらぬ花の垣(付句)——木節(馬道下・I秋近一七)

### b 連体形

打かけた蕎麦にもあはず開嫌ひ(付句)——沾州(皮籠摺上・IV萩原一五)

仕懸たる仕事も多き蚊遣かな——野刀(その花上・I諸句七五)

讀かけし狭衣持て窓に寄り(付句)——兎角(老旅六・九三)

### c …かけてある

木の株のほりかけてある枯野哉——二鶴(浜狹・VI冬句二七)

参 掘かけた庭木のミゆる餘寒哉——陸麿(花千部・I諸句三〇八)

机は墨のすりかけて有(付句短)——袖双(芳門句膝・I柳四四)

### d …かけておく

郭公くりかけて置袂数珠——毛雨(六行会下・I夏句五〇)

掃ためを捨かけておく春の雪——許六(韻塞上・IV正月四二)

明ヶ懸ておく露次の戸の奇麗にて(付句)——旭江(旅袋下・VI鶯二七)

参 猫に障子の明かけてある(付句短)——斗秋(梅香炉上・一一)

杉の葉を出しかけて置く御酒屋(付句)——浪花(浪花日記・I風月五〇三)

### e 動名詞

解かけにして子の寝入襟(ちまき)哉——菊泉(千町田三・I仲夏二〇)

吾かけの茶碗かゝえて端居かな——瘦山(老旅十・三三七)

おきな子の刺かけ髪に頭巾かな——雪徑(残花集三・八五)

他動詞「掛ける」が単独に用いられる場合、「Aが・Bを・Cに・掛ける」の式が基本の文形になるはずと予測できる。複合動詞(…し…かける)においてもこれら三要素との関連を中心に観察を進める。例題は先ず人が主語であるものを広く拾ってAに置き、「かける」が実義(原義に近い用法)に使われているものをI項とした。なお物に関する擬人化の著しい例をもこれに含めた。実義の例文では「に」の部分が場所を表わす名詞であるとき、とりわけ鮮明な具象運動が認められるので、その類を最初に取り出した。「おおいかける・寄せかける・釣りかける」は複合の形を取っているが、「かける」の意義用法は全く本来の通りである。自立動詞「掛ける」の一文をそれぞれ「参」として挙げてあり、原参の相同は一見して自明である。別に問題もないので次へ移る。

2部の諸例では行為の主体と「に」によって示される物との間隔が多少とも開いており、「場所」というより「目標」とした方が適切である。これに応じて「かける」の表意も転移する形勢のあるのが看取せられる。a「散らしかける」の一群ではなお原義のままの用法、参照に引いた句が原句と符合することからもそれは知られる。しかし「掛ける」の示す行為は既出のような具象運動とは少し違っている。目標との距離もあるが、むしろ客体(水滴など)がその性

質上具象の点で小差を見せるからではなからうか。bへ入ると目標は遙かに遠く、やがてそれがぼやけている。動詞の表わす行為はむしろ具体化しているのに、「かける」の抽象化はにわかには甚だしく、ここで漸く親動詞（掛ける）との分離が認められる。似たところのある例文を並べてみても、符節を合わせるといような結果にはならない。引例初めの二文ではまだ方向義が表面に出ており、同義も本来は親動詞から受けついでものと考えられる。参考に添えた「掛ける」の二文は原句と内容を異にするが、「方向義」を確める参考にはなるであらう。ここで注意したいのは原句における方向義の裏から主体の動意（行為）に対する能動的な意志の表明が読み取られることである。この種の動意は続く二文において一層はっきりと表面化し、「馬を乗りかける」「砂を荷いかける」の「かける」は意志の表明を主、方向指示を従にしている。恐らく目標を明示しない原句の表現から来るものと想像せられるのであるが、類似の事象は先へ行っても観察することになるので、検討はそれに譲り、いまは末例を一顧するだけで済ませる。「何もかも抜からぬこへ投げかけて」は一切をむこ委せにしている人の形容、無象の事柄であるが、「投げかける」は原義からの直接的な比喻用法と考えて、便宜この個所に置いた。文中「に」の要素には人（むこ）が当てられている。目標が人ということになって生ずる変化は問題としたいので、部を別に次で考える。

第3部のaには「言う・借りる・見せる」などに関する例が拾われた。これらは人を与格（に客語）に取る代表的な動詞であり、その人は行為の影響を直接受ける利害関係者であるところから、「

に」の部分の主張は文中おのずと強まることになる。よく知られたことであるが、「かける」との関連もあるので初例を引いて一考する。「こむ僧のもの言いかける（枯野）」では文面から与格客語が消えている。作者自身がそれに当たり、自明のこととして省かれたのであらう。対話は無象に近い行為であるのに、隠れたこの人はかえってはっきりと浮きあがっている。もともと会話は対等の場で為される種類のもの、しかも対象は話者その人である。そのうえ対格客語（もの）は特に軽小化しているので、文中の位置は当然顕著になるのだと言える。事実「行為の目標」と言ったのでは間接に過ぎる状況である。にわかには適語も思い付かないので、「対者」の語を借りて表わすことにする。対者の存在が有力になったからであらう、引いて「かける」の方向義も具体化し、「人を相手に」ほどの対向応接の意が表出している。それは後続の数文を読み合せてよく分かることである。しかし「かける」の表意は流動し易く、条件の僅かな違いで微妙に変化する傾向のあるのも感ぜられる。初文のすぐ脇に添えた類例が一証となるので参考する。「面白い無理言いかける（花の関）」は花を分けてくれと言いついたことを指す文意かと思われる。逐語の原義は不明であるが、人が咲かせた物を所望するのは無理なこと、それを作者は「関」に例えたのだと仮定する。そうすると「かける」には「人に向って」の意ばかりでなく、「無理を押し頼んでみる」という類の決意が表明されることになる。ところでこの句は多分に主観的な表現である。「面白い」、「無理」、さらに「花の関」は単なる客観の記述ではない。引いて全文が情意表現に傾く点は、枯野の句と比べて容易に首肯せられる。どうも客

観的な記述中では対向の意を示すはずの「かける」が、主情を述べた文中に置かれると、主体の動意→行動への能動的な意志→が表われるのだと予測せられる。試みに続く数例を主観の感情が含まれる類の表現として読み返してみる。それらの「かける」にもまた動意が表出するのを認める。そして後半の例文ではそう解する方がむしろ適切かとも思われる。情意表現における動意についてはあとのbでも再言する。次に取りあげたいのは対者の問題であり、たまたま事例の一つがaの末尾に見えるので引用する。「(花衣) 背中ばかりを見せかけて」には対向(人を相手に)の意もあるが、主体の動意(誇示)が一層強まっている。先ず気付く点は対者が特定の個人でなく一般多数の人ということである。もともと対者の存在が有力になつて生じたと考えられる指向義なのであり、その存在が弱化するれば同義も当然転化するはずと考えられる。しかし対向の義は弱まるとしても、主体の意志が表出するのは何故であろうか。「見せる」はその原義からして行為者の意向と結び付き易いからであろうか。視点を少し移して考える。「向かう」という場合には空間的な対向の意と主観的な志向の意とが表裏の二面を成している。「向かう」と類義に使われる「かける」においてもこの両面があり、もし空間義が押えられれば主観義はおのずと現われるのだと説明した方が妥当なのかも知れない。「見せかける」は独自に展開し、特殊な意味を持つに至つた成語、主体性のさらに濃い「自己偽装」の意に転用せられることもしばしばである(引例の類句参照)。もっと一般的な動詞の例について対者のことも次の個所で観察する。

文意の点はaと大同であるが、対者(与格)と客体(対格)とが

併置における「…しかける」の用法

事実上一致し、そのため「に」の部分が消えた文形をことさらにbへ移した。独立の対者が存在しなくなれば、「かける」の対向義も薄れるはずと考えたからであり、実情もその通りと見られる。結果はしかしaで観測したところと同規である。繰り返しは避け、事象を確かめるだけに通り過ぎる。初文「受けられて・余所へ行くかと——恨みかけ」の「受けられる」は「身請け」の意と判読せられる。相手ははっきり決まった女性のはずであり、「その人に向つて恨み言を言う」と取るのももとより極めて自然である。しかし内容は心理に関する事柄なので、「かける」も情意の表現、「詮ないことを口説いてみる」と読んで、何の不都合もない。この辺の事情は先に出た「花の関」と同じであり、動意の表明はこちらが少し厚いとして差しつかえないであろう。続く二例「乗せかける」「化かしかける」では「乗せる・化かす」が欺く意、「かける」の方には主体の動意が著しい。行為は主動性の強い性質のものであり、対者は未定あるいは不定の人称になつてゐるからであろう。かかる関係もまた既出の「見せかける」とよく相応する。末句は「(普請場に)月待ちかけん(けいこ舞)」というのである。「かける」に客観義(月に対する)の入る余地は殆んどなく、ただこの人の意向を述べるだけの働き、「待ちかける」はそのまま「待ち受ける」の強調表現という結果になつてゐる。ここで動意がにわかに固定するのは、「待つ」が主情に関する事柄であり、さらにそれより対象が月光に過ぎないからであろう。物を客語に取る例文はすぐ次の4部で再検する。それへ入るまえに3部での観察を摘要しておく。文中「に」の部分に人が来ると、強まって与格客語の性格を帯び、「かける」はそ

の人に向かう意の空間義を具象化する。文意の關係で対者（与格に置かれた人）が不定になるか、あるいは客体と合一する場合、「かける」の空間義は弱まり、動意の表出が強まる。この傾向は心理や感情を述べる表現で顕著となり、物を客語に取る構文で定着するといふのであった。

第4部では物を客体とする例文を引いて、動意の点を確かめ、開始義との関連に一つの手懸りを求めようとする。初句「（どれどれと）月に包丁鳴らしかけ」は刃を整えるために包丁を打ち合わせたこと、料理に取りかかる人の説明と見なししておく。対者が消えていることは、「月」をそれに仮想して見れば明白である。客体としての包丁は印象鮮明であるけれども、小さな道具に過ぎず、空間的な対向の意などには思いも寄らない。「包丁に向かう」は「調理に向かう」と同義、「かける」は行動意志の強調になるのも自然のことである。用法がここまで抽象化すれば、これを補助のうちも含めることが可能であり、その立場もありうるかと想像する。しかし開始義はまだ介入していない点に注目したい。既出の諸例中実義のものは論外とし、形式化の進んで見える3部bを通過しても開始の意は看取しがたい。当面の一句においても「鳴らす」を上記のように読むのであれば、「かける」は意志を表わし、開始の意とは取りにくい気がする。しかも「鳴らす」を例えばまな板の音と見る場合、事情が少し変わるように思うのは余りにも主観的な変差であろうか。物を客語に取る構文では動意が固定する反面、こんどは着手との区別が不分明になりがちである。続く二文「（こっそりと）中手で酒を造りかけ」「（つかつかと）渡りかけたり（春の水）」は初

句と酷似する表現、動意は文中に明白であるから、「かける」を立意と見て何の不自然もない。ただこれら三句は下った時代の作例であり、その頃には当然補助用法も進んでいたはずである。単純な開始の用法と見るのにこれまた何の不都合もない。ことに第三の「渡りかける」は「渡り初める」意の常用語とも見られ、疑問はいよいよ濃厚である。しかしまた翻って考える。単に俳諧内での実証に過ぎないけれども、明確な開始の用法は従属文中に見られるのが大多数である。たまたま「渡りかける」の一例があるのでそれについて観察する。「渡りかけてーモの花のぞく（流れ）」は文中前後の意味關係から「渡りかけー足をとどめー水草を見た」事実がくみ取られる。つまり従文で行為の開始、主文でその中止が伝えられる表現であり、この種の類形が補助用例の最も多数を占める。一方当面4に見られるような言い切りの形はその例が極めて少数であり、しかもそれらは開始の用法と決め去ることができない。4の残る二つは元禄の俳書から引用した。かく言い切って済ましてあるのは、当時の慣用が大よそ定まり、これで明白だったからであろう。はたしてそれが動意か着手かは判然としない。何れ僅かな相違であるが、動意は主観の表明、着手は客観記述の方へと傾いてくる。次のⅡ項では客観的な開始の用法を尋ねることになるので、その前に志向表現との差を確かめておくため、引例最後の一文とその比句を取りあげよう。先ず原句の方は「（夕月のおぼろに）びわを弾きかけて」というのである。これを開始（弾き出す）と取れば、表現は客観的、文意は直裁簡明である。動意（心を決めて弾く）に読めば、主情の表現となり、原意はむしろこの方かとも思われる。比句とも合わせ考

える。「誘われて——暮打ちかけたる——花見」は表現が少しもつれているので、それをほぐしながら解釈する。先ず上二つの部分に主眼を置き、「誘われたので——暮を打つ気になった」と見る。そうすると「花見」はその時期や場所を示すことになる。次にあとの二要素を中心にして考えると、「打ちかけた暮もやめて、花見に誘い出された」の意に落ち着くはずである。始めのように言い切りと見る読みには意志の導入が可能であっても、あとのように言い継ぎと取る解には動意がはさまりにくい点に注目する。

これまで実義の用法を追い進んで動意の問題に行き当った。あとは直ぐに開始の用法へ接続する実状であり、その間の消息は誠に不分明である。動意は当然に着手の意を内包し、着手はまた次に述べた類の中止という条件で規定せられ、「かける」はそれ独自の開始義を表わすことになったと推測する。

Ⅱ項には開始の意を表わすと見られる例文を引いた。述部用言が言い切りの形を取る例が少く、表意も志向と明確な区別が付かないので、I 4に含める趣意は既に記した通りである。残る言い継ぎの例文では「着手+中止」を暗示または明示する性格が一貫しており、その点を再検しながら気付いた一・二の点を言い加える。幸い「折りかける」の諸例がそれらの点を一応指摘するので、最初に取り出して1部に置き、一般動詞に関するものは2部へ一括した。観察は1部に限り、2部への言及は必要だけにとどめた。初句「折りかけて・また枝変える(ツバキ)」では上の部分で動作の始発、あとの部分でその中止が告げられており、類似の条件は先の「渡りかけて」(I 4第3比)で観察済み、冗説は避ける。「かける」が連用接続

併置における「:」しかける」の用法

の形を見せるこの種の類形は頻度が最も高く、2 aの一般動詞に関する例文についてはただ貞享・元禄に限って抄出した。それでも数は多すぎるのであるが、主従両文の意味関係に親疎の差が認められるので、そのままに残した。「開始——中止」の性格は何れにおいても大同、吟味は省略する。仮にこの形が補助用法の基本形と言いうるものであれば、当面1の第二句「折りかけて・折らずに行きし」、類例「折りかけて・捨てて枝あり」のように行為の否定や断念を明示する表現は補助用法の素朴形と言うこともできるであろう。述部用言が連体の形を取る場合でも事情は殆んど変わらない。例えば第三「折りかけた枝のも——開く」を初句と比べてみれば、前後二文の関係には似た点のあるのが知られる。しかし第三及び類例のような表現を読み返すと、「かける」の中に中止の意まで含まれようとすると氣配の濃厚なことを感ずる(参照2 b)。この傾向は次句で一層明確、疑いのないものとなる。「折りかけてある桜」は「折りかけたままの桜」、もつとはっきり言えば、「半ば折られてなお幹に付いている桜」の意である。他の条件によらず、「かけて」自身が中止の意を表わすと見て差しつかえないであろう。「:」しかけておく」もこれとよく似た成句であるが、「おく」の表意が変動するので、事情は少し違っている。1の末例「(しかかれて)折りかけて・おく(桜)」の「おく」は断念・放棄の意、参考に挙げた「書きかけた絵筆を置いて(一工夫)」と類義の用法かと思われる。そうするとこれは第二句で述べた素朴表現の一形ということもできる。「置く」には別に一層抽象化した「放置」の用法があり、従って「:」しかけたままに捨てておく」と読まれる例をも散見

する。「折る」以外の動詞に関する例が2dに引かれてあり、初めの二文は中止、あと二例は放置と読んだのであるが、補助用言の二個が直接するこの種の表現は時に不分明、このの判読にも疑いが残る。例題Aの最後(Ⅱ2e)には「しかける」が動名詞化した例を追記している。末文「幼子のそりかけ髪に頭巾かな」は子供がむずかりだしたので、母親が途中でそりやめた髪のことを言うのである。補助用法の最も展開した一形であるが、中絶の意は消えないことを言い添える。

例題Aには主として人を主語に取る「…しかける」の用例が掲げられた。いま辛くもその觀察を終り、次は物に関する例文へ移るはずである。しかし事例のうち擬人化の著しいものは既にAへ含め、天象・氣象を述べる一群は例題Bのためにと取り置いてあるので、残る純粋な事物に関するものは誠に僅少である。「物が物を物に掛ける」ことは希であるから、実義の用法は珍しいのだとしても、補助の例文がまた僅かである。独立の例題は立たないので、直接ここへ引用して、およそ次の程度である。

味らしふ濱の相場のひねりかけ「付句」——如岫(二七八二 桜の許し四・四〇六)

初夢の果報漸めくりかけ「付句」——眉峰(二八五八 初時雨下・X有明五)

寒さへ利かす痴氣のきさしかけ「付句」——可柳(二八一五 残花集八・二二)

引証の数は少いけれども、性格は著しく人の目を射る。何れも「しかける」で言い切っているが、ここへ主体の動意を当てるのは困難である。共に単純な開始を表わし、しかも休止しそうな様子はない。

い。こう見てくると、先ほどまでたどたど歩いたのは迷路に過ぎず、別に存する正しい道を見落してきたかの不安や当惑を感じる。しかし上記の三文は特例であろう。後世の作品であることは付載した年紀が告げる。表現は自由な日常会話体に基づくことも内容や文調から察知せられる。恐らく用法が一転した後の口語におけるいわば特例であろう。実例を追う間に主となった先入である。やはりそれに固執して、「かける」の開始義は人に関する動意の用法から展開したのだと考えたい。ただその推移の方向に二種あり、一つは中止を内蔵する開始の意で人に当用せられ、一つは単純な開始義で物にまで延用せられるに至ったのではないかと。そして両者は河水の表面と内面の如くに共流し、たまたま潜流が上記三文の形で現われたのではないかと。今日補助用法の「かける」は必ずしも人に限らず、必ずしも中止を予定せずして通用する。これはかつての内流が表面に出たのだとは見られないであろうか。

人に関する「かける」の用法を考えながら、「かかると」の対比は殆んど問題にならなかつた。両形は独自の性格を示し、平行して交差する場がないからである。「かかると」の用例は本誌の第四号に掲載せられた。そのAの部分と照らし合わせて、両者平行の事実には認容せられるかと思う。一方物を主語とする例文においては事情がすっかり逆である。どちらも単純な開始義を見せ、用法は極めて接近する。特例と名付けた先の三個と「かかると」のBⅢとを読み比べれば、数の多少は別にして、酷似の跡は著しい。次の例題Bへ移ると、二形の対照をむしろ觀察の重点とする。両者類似の検討もその個所へ送る。

例題 B 天象気象

I 実義の用法

月の出に嘯とは風の落し懸〔付句〕——子珊〔続別座敷上・Ⅲ藤棚一三〕

比 落かゝる月影白し梨のはな——素丸〔養笠上・Ⅲ春句六〇〕

吹かける雨を横きるはたるかな——北海〔竹芝・Ⅵ追加一三〕

比 降かゝる雪ふるふ馬のあはれ也——蓑笠〔三つの顔・Ⅹ冬句一八〕

稻妻やある時瀧にむすひかけ——巴愈〔三千化人・一一〇〕

比 稻妻のこほれかゝるや岡の松——楚疏〔高野・Ⅷ秋句一一〕

春風のまくしかけたる小雪哉——桂五〔法法華経四・春雪二〕

比 川石にまくれかゝりし落葉かな——遊子〔祚原四・Ⅰ冬句二二〕

II 補助の用法

1 一般現象

つみかける雪吹ちらすそへ雨〔付句〕——松花〔二八一五 残花集九・二九〕

比 淡雪やたまりかゝれば日がくる——可楽〔二六九七 菊香Ⅱ冬句五〕

薄すりと出かける月もくれ近ふ〔付句〕——楚白〔二七八二 桜の許し五・三三〕

比 しら〜と月の出かゝる峯の華〔付句〕——団友〔二六九九 茶蘼子・Ⅲ野馬一七〕

三井の鐘響きて月も傾〔かた〕きかけ〔付句〕——風也〔二七九八 文月影集上・一七〕

比 山の端に日は入かゝる油賣〔付句〕——友琴〔二六九一 西雲下・Ⅰ桜二一〕

消かけし虹の日裏の柳かな——鷹明〔二八四六 花標・Ⅰ諸句三六〕

比 消かゝる虹の根に啼うつら哉——丘芝〔一七〇二 東西夜話中二〇三〕

山水もぬるミかけてやはッ桜——蓬戸〔二七八九 桜浄土下・Ⅰ名録九八〕

比 ばいやりと和キ〔やわらき〕かゝる花くもり〔付句〕——如儀〔二六九九 小舟・Ⅴ冬部二七二〕

2 暮れかける

くれかける日に吹よせる落葉哉——千寿〔二八三七 千町田五・Ⅰ初冬二六〕

比 渡し場に日ハつる〜と暮かゝり〔付句〕——藤吾〔二七〇〇 雪月花上・Ⅳ恋連五五〕

暮かけけるほろ〜雨や啼蛙——流芝〔二八四三 花千部・Ⅰ諸句四二五〕

比 くれかゝる空につめたき横あられ〔付句〕——露荷〔二六八七 成句饑別・三六〕

暮かけた山やさなからおほる月——霞波〔二八一五 残花集七・二〇一〕

比 暮かゝる山は鳥に雪の華——支考〔二七〇一 その花上Ⅰ夕顔三五〕

ロッパの窓も次第に暮かけて〔付句〕——路悠〔二八一五 残花集九・七〕

比 暮かゝる障子をやはり明て置〔付句〕——和木〔二七〇三 霜光上・三七〇〕

3 (付記) 暮・掛けて

露しくれ歩鴨〔かちう〕に出る暮かけて〔付句〕——荷号〔飛野外・Ⅰ雁雁二七〕

参 寒壁や夕月かけて油賣——角巾〔東華集中・二二一〕

暮かけて暗盛りたるほとゞぎす〔付句〕——史邦〔小文庫上・Ⅴ桜見二二〕

参 千鳥啼あつきかけて帆山寺——ハ・ハ〔東西夜話中・三三二〕

松陰的場の聲の暮掛て〔付句〕——団友〔新百韻・二九〕

参 動突〔どうつき〕の有明かけて鳴り渡り〔付句〕——桃隣〔陸奥千鳥二・Ⅰ夜雨五〕

例題 B には天象気象に関する「ししかける」の用例を引き、「かかる」の類形を「比」として添えた。本誌前号「かかるの用法」にはこの種の事例を保留しているため、追補の意をも含める。最初の I 項には実義の用法と見られる四組を掲げ、初めの一組を基にして全般的な推測を加える。原「(どっとは)風の落としかけ」、比「

俳諧における「ししかける」の用法

落ちかかる月影（白し）の「かける」「かかる」は方向義で使われているものと考える。風と光の違いはあっても、述べる現象は類似している。しかもそれを表わすのに一方では他動詞「落とす」、他方では自動詞「落ちる」が用いられ、それと対応するように「かける」と「かかる」が言い分けられている。この関係は続く三組においても変わらず、偶然とするよりは何か理由があると思た方が穩当である。ここで提起したいのは超人称表現 (impersonal expression) と呼ばれる事象である。古代人には超人格的な存在を認めようとする心理態度があり、言葉にもその態度から出た表現形式があったと説かれる。この説をいま挙げた例文に引き当ててみる。「風落とす」はかかる未知の動因を主語に取る構文、「風」は客語、「落とす」は他動詞、つまり「――が・風を・落とす」の用意だったと想定するのである。ところでこの種の古代意識は早く失われ、新しい主体の認識が生じたので、表現様式も変わるようになる。後者を先の形式と対照して人称表現 (personal expression) と呼んでいる。例えば「風落とす」の場合、現象の主体は風であるから、「風が・落とす」の意識と分析が現われ、引いて「落とす」がそのまま自動詞化するに至ったとするのがその一つである。これは旧形がそのまま保たれた場合のことであるが、一方自動詞を用いた「風が――立つ・起こる・当たる」の類が自由に登場すべきことは言うまでもない。そう考えると例題引用の比句「落ちかかる月影」は人称表現の一種と見ることができる。同種の現象を記すのに二様式があり、原句の方は古い形の継承、比句の方は新しい形の当用と言いつてもよいであろう。なお一つ別に臆測を加えたい。古代人の自

覚が近代化したのは古い時代のことと言われ、我国においてもそれは同様であったと想像せられる。しかしこの転換が初まって以後も超人格的な存在認識は、たとえ無自覚にしろ、意外に長い間持ち続けられたのではないかと疑われる証跡がある。もしこれが事実であれば、「落としかける」を単に古代成句の残存と見るだけでなく、生きた意識から生じた表現と推測することも可能である。少なくとも「落とす」には他動詞的な語感が強く伴うことは疑いえない。かかる語意識の故に「かける」が呼応することになったというのは十分に考えられることである。他動詞の問題に関連して引例の第二に言及する。「吹きかける雨を横ぎるホタル」では「雨がホタルに（を）吹きかける」の形、「ホタル」は客語というに極めて近い。本来「風吹く・雨降（振）る」も超人称の表現と仮定すれば、例文は人称化した形であることを断わるまでもない。構文が転じたあとも述部用言はなお他動詞の働きを示すことに注目する。「風が――木を吹く（谷をおろす）」「波が――もくずを引く（岸を打つ）」なども参照せられる。日本語の気象表現には前から不審を懐き、当面の例題はことに鋭い形でそれを提起するので、試案を述べた。批判を待ち、また再考を期したい。

Ⅱ項には単一な開始義を見せる「かける」の用例を取り、「かかる」の類例と合わせ観察する。初句原「積みかける雪（吹き散らすそばえ雨）」、比「淡雪やたまりかかれれば（日が暮るる）」は前項の諸例に対応する文形であるが、そのことはいま論外とする。ここで「かかる」はもちろん、「かける」も単なる始発の意に判読せられる。両者の表意は少し違っているのを感じるけれども、末尾の一

文でこの点に言及する。第二句（出かける月・月の出かかる）以下の数文では用法がいよいよ接近し、第2部の「暮れかける」「暮れかかる」はもう全同と見なしてよい実状である。中止を予想しない開始義を発生すれば、「かける」も「かかる」と合一するのは当然のことである。しかしこの展開が両形同時に平行して進んだのではなく、前後のずれがあったと推測せられる。天然現象の始発を表わす「かける」の例文は元禄の俳書からは容易に得られず、気付いたのはすべて「かかる」の形である。そのうち一部は引例へ「比」として添えた。後期へ入って漸く「かける」を認め、年次の下るとともに頻度を増し、遂には「かかる」を押える形勢にあることが大よそに看取せられる。第2部においても事情は同一、形跡は一層顕著である。「暮れかかる」は初めから頻出、偶見する「暮れかける」は後のものばかりである。ただ類似の形で「暮かけて」というのは古くから散見する。これはしかし「暮へ掛けて」の表現、「掛けて」は時間の継続接近を表わす用法、「暮」は名詞と判断せられる。一種の慣用語であるが、それでも「掛ける」の実義は少し残されている。一方でかかる成句の行われる事実是他方で単純始発の「暮れかける」がまだ一般化せず、少くとも文章語として普通でなかったことを示す傍証となるような気がする。逆に後期へ入ると「暮掛けて」は衰微する反面、「暮れかける」の開始用法が活発となる。その事情の一斑は2部の引例からも察知せられる。「暮れかけて」の形は現われるけれども、多くは文意の偶然から連用形に置かれたものと見られ、一証を末例として掲げた。この辺の「かける」は純粋な始発義を示すだけであり、補助用法としての一つの極点と言って

俳諧における「：しかける」の用法

よいかと思われる。

最後の3には「：しかける」と直接関係ないことであるが、「暮掛けて」の少数をただ参考にと付記した。「時（所）掛けて」は当時の常用、紛れない名詞に続く形をやはり元禄の俳書から抜いて参照とした。「暮かけて」は不分明なまた疑いの置かれる形であるが、原参対読してその用法が推測できるかと思う。

「：しかける」の開始義は人に関する動意・志向の用法から派生し、二方向へ推移したという仮説を例題Aの結びとした。一つは中止を予定して人に用いられる開始義であり、それはAで概観した。一つは単純な始発義を表わし、事物にまで延用せられる方向であり、当面の事例もそれに該当するものと考ええる。気象などに動意を予想するのはおかしいことであるが、風雨電雷を主体とする意志の表現は必ずあつたはずと信ぜられる。試みにBⅠの四文を単に空間運動を示す記述とのみ見ないで、主体の動意も含まるものとして読み返す。その方が一層適切と感ずる例文もあるのではなからうか。その個所でちよつと触れたⅡⅠ初句の「積みかける雪」にさえ動意がこもるかと思われる。しかし対象は天空に過ぎない。動意も意志も速かに客観的な始発義へと移るのもまた自然の勢いであろう。こう見てくると、「：しかける」の開始義展開には天象や事物に関する用法が大きく影響したかとも推測せられる。